「漢字列」のとらえ方
―明治期の資料を緒として―

多賀糸　絵美

Abstract:

The perception of “Kanji-retsu”

:Using literature materials of the Meiji

A purpose of this study is to clarify the term "Kanji-retsu". Kanji-retsu is character string on kanji only.

I used Kusazoshi in this study. It is a kind of book printed from woodblocks that was published in Edo from the middle of Edo period to the beginning of Meiji period. And I used language dictionary "Genkai" that was published in the Meiji Era. These books are very valuable materials for the study of Meiji period Japanese.

“Kanji-retsu” has a similar word in a Japanese study, and there are several patterns. In conclusion, the author suggests that it is necessary to define the usage of this word.

要 旨：

日本語の研究においてしばしば使われることのある「漢字列」という用語について検討する。「漢字語」「漢字表記語」といった類語の確認とともに、漢字で書かれている文字列に対して「漢字列」という扱い方をするときに、どのような研究の方法があるか、また、「漢字列」について「漢語漢字列」「和語漢字列」といった、語種を冠した用語を設定した場合、どんな認識の仕方ができるかを検証した。検証には明治期の資料である明治式草双紙と、国語辞書『言海』を使用した。その結果をふまえ今後「漢字列」という用語をどのように使っていくことができるかについて述べる。

キーワード：

漢字列　漢語　和語　草双紙　言海

はじめに

文献に漢字で書かれている文字列に対してそれを指し示すときに「漢字列」という用語が使われることがある。本稿では、その「漢字列」というとらえ方について、それが指し示すものを再確認するとともに、「漢字列」の性質について考察する。また「漢字列」というとらえ方をすることで、日本語の表記、語彙にどのような有用性があるのかということについて考察する。

１.「漢字列」とは

はじめに、「漢字列」という用語を取り上げている論文等について確認しておきたい。

まず、今野真二『消された漱石―明治の日本語の探し方』（2008 年　笠間書院）において、「漢字列」という註がたてられている。

> 文字（列）に語としての資格、具体性を与えられない場合、あるいはそのような「段階」で、この文字（列）を「漢字列」とよぶことにすると、語を特定しないままでも観察、考察を続けられることになる。（79 頁）

山田俊雄は『日本語と辞書』（1978 年中公新書 494）において「漢字語」という見方を提唱している。

> また現代の日本語を想うとき、日本語は、書記言語的性格の点でいちじるしくすぐれていると思っているので、書記言語としての語彙を取扱うところの別種の考え方を持つべきでないかと思う。何と読むべきか確定できない漢字の熟語、時代によって、場合によって、読み方をさまざまに変えるけれども、見える文字連結としては、一定の文字列としての漢語を、むしろ音声言語風に還元して扱うことをやめて、全くの書記言語として、つまりは文字言語として扱う手を考えることである。つまりそれは、由来からすると中国語であろう、しかし日本人もつくり出す、えせ漢語もあろうから、すべて一括して扱うために、「漢字語」という枠を設定して、そこで一括して取扱う。和語は、いわば音声言語としての

存在がみとめられ、『万葉集』の歌にも詠み込まれる。漢語は歌には排斥される伝統があった。「漢字語」というジャンルを設定することによって、上代語の辞書には圏外になるものをすべて収容するという方法がありうるであろう。それは、必ずしも臨時の便宜の方法とのみはいえないのである。むしろ、学問的な研究の方からの要請にも十分応じるものである。(『日本語と辞書』21 頁～22 頁)

今野（2008）では上記箇所を引用したうえで、「ここでは「漢字語」という表現が提示されているが、山田俊雄はむしろ「文字連結（文字列)」という表現をしばしば用いており、文字が連なった「文字連結」があって、その文字が漢字であった場合には、「漢字列」とよび、仮名の場合は「仮名列」とよぶことには充分に意義があると考える。」（九十一頁）と述べられている。

『日本語学研究事典』(2007 年　明治書院）には「漢字列」「漢字（表記）語」という項目はたてられていない。『漢字百科大事典』(1996 年　明治書院）には「漢字表記語（漢字語)」という項目があり、以下のように説明されている。

広い意味では漢字で表記されている語のことを言うが、研究者の間でもこの用語の概念については未だ共通理解が十分にはできておらず、術後として用いるときは定義が必要である。「漢字語」と「漢字表記語」とが同じかどうかについても同様である。（中略）一方、漢字で書き表した語をすべて含む用語として「漢字語」を使う人もいる。この場合は和語や外来語も「物語」「倶楽部」のように漢字で表記されていれば包括される。この用法は、近時片仮名あるいはローマ字で表記された語を表記文字に着目して「カタカナ語」「ローマ字語」と呼ぶことが増えているが、これらと横並びにもなる。また、まれに「漢字語」を字音語と同義で使うむきもある。

「漢字語」と「漢字表記語」のほかに「漢字列」と言う場合もあり、それぞれの研究者によってその都度さまざまに使われているように見える。

田島優『近代漢字表記語の研究』（1998 年　和泉書院）では、「漢字表記語」という用語が使われ、「筆者の考えている「漢字表記語」とは、文字どおり漢字で表記された（される）語のことである。ただし二字以上の漢字連結という条件だけつけておく。漢語でも和語でも外来語でもとにかく漢字で表記された語のことであり、平仮名や片仮名で表記されるよりも漢字で表記されることが一般的な語のことを指す。その漢字表記がその語にとって特定のものであるのかどうかは問わない。」（4 頁）とあり、また、「筆者の「漢字表記語」は（特定の音を持っている）語を表示するにあたっての漢字連結の運用という立場からのものである。」（5 頁）ともある。その中で荒尾禎秀「「熟字」の諸相-『好色五人女』の場合」（『国語国文学論叢 太田善麿先生古稀記念』1988 年）をとりあげ、「荒尾禎秀氏は「二字以上の熟合した漢字列」と定義している。筆者の「漢字表記語」は荒尾禎秀氏の考えと同じものであると思うが、このように「漢字語」の概念が研究者の間で異なっている」（五頁～六頁）と述べられている。

門前正彦「語彙に関する一問題」―「漢字語」をめぐって―（『語源探求』三　1991 年　明治書院）「四「漢字語」について」においても、先に引用した山田俊雄『日本語と辞書』同箇所があげられており、「漢字語」という設定はほぼ山田俊雄の言説にささえられているとみてよいようである。門前（1991）において留意しておきたいのは「漢字表記語（漢字語）を古くは必ずしも音読していなかったという可能性に、注意を促しておきたい。古代文学による不充分極まる表記と言語との対応状況から考えて、表記と言語の両者は、区別して取り扱うべきことは、これまで指摘してきた。本来、日本語を漢字によって表記したにすぎないので、漢字表記であるから音読という従来の短絡的な考え方は成立しない。」（171 頁）と述べられている点である。「音読しない」ということと、山田（1978）の「全くの書記言語として、つまりは文字言語として扱う」ということとは通っているとみることができる。

その他、「文字構造の文法記述に基づくオンライン手書き漢字列認識(テーマセッション 4,文字・文書の認識・理解)」（大田 郁実、山本 遼、西本卓也 [他] 、嵯峨山 茂樹　電子情報通信学会技術研究報告. PRMU, パターン認識・メディア理解）や、「機械可読辞書の見出しについて」（田中 康

仁　情報処理学会研究報告. 自然言語処理研究会報告 1997 年）など、情報処理や通信などの分野で「漢字列」という用語が使われているようである。

「漢字列」という用語がそのまま使われることは少数であるが、「漢字列」は「漢字語」「漢字表記語」よりも幅広く使用できる用語であると考える。「漢字表記語」の場合、「漢字で表記された語」という意味合いであることになり、語は明らかであることになる。「漢字語」は「漢字（で書かれている）語」であると捉えられ、語であることはおそらく認められるが「漢字で書かれている」ということに重点があるように思われる。「漢字列」は、「文字（列）に語としての資格、具体性を与えられない場合」（今野 2008）であってもその文字列を指し示すことができ、「漢字語」「漢字表記語」よりも広い概念で用いることができる。また、「語を特定しない」という捉え方は、今までになされてこなかった表記研究の新たな観点になり得ると考える。今後有用に使用できるのであれば、ある程度定義づける必要があるのではないかと思われる。

２．資料における「漢字列」

実際に文献に現れる「漢字列」をとりあげる。本発表では主に明治期の資料について考察する。

２－１．高橋五郎『[和漢／雅俗]いろは辞典』における漢字列

ふしあはせ（名）不仕合、不幸、失志、失望、薄命、わざはひおほきこと
ふしあな（名）　木眼、きのふしのあな
ふじさん　富士山、不蓋山、不死山、不二山（駿河國富士郡を中央として伊豆甲斐に跨る大山の名）、芙蓉峰
ふしぎ（形名）　不思議、あやしさ、さとられぬ、奇、くすしき
ぶじき（名）　夫食、食米（食料の米）

高橋五郎『[和漢／雅俗]いろは辞典』は、明治 21（1888）年に刊行された国語辞書である。「ふ」の部の見出し項目を例にみてみると、見出し項

目・品詞があり、その次に漢字列がいくつか羅列されるかたちで語釈が載せられている。根本真由美「高橋五郎『[和漢／雅俗]いろは辞典』の資料性」（2007 年『日本語の研究』第 3 巻 4 号）ではこの語釈の形式について述べられており、以下に引用する。

> 和語・漢語項目共に最も多く観察できた「語釈」のかたちは「見出し項目―漢字列（＝漢語）―和語釈義」であった。これは漢語には和語を、和語には漢語を配置しているとみることができ、書名の「和漢」につらなる方針と考えられる。また、漢字列に「漢語」が配置されたということは、明治期においてはそれが最も自然なかたちであったからと考えられる。明治期非辞書体資料に現れる漢字列と振仮名をそれぞれ語と認めたとき、『いろは辞典』の「見出し項目」と「語釈」として「循環」することが見いだせた。これらは「結合」を有していた二語であると考えることができ、明治期の語（や語彙）を考える際に『いろは辞典』が有用であると考えられる。（要旨より）

ここで「漢字列」という用語が使われている。見出し項目「ふしあわせ」にあげられている漢字列「不仕合」「不幸」「失志」「失望」「薄命」が、語意としてあげられているのか、「ふしあわせ」の表記としてあげられているのかなどの判別をしなくても「漢字列が配置されている」というとらえ方をすることによって、語釈のかたちを指し示すことができる。そのような示し方がこのような資料では有効であると思われる。

２－２．草双紙における漢字列

漢字仮名交じり文で書かれた草双紙を、明治式草双紙と呼ぶことがある。以下に『嶋田一郎梅雨日記』（五編十五冊。芳川春濤閲。岡本起泉綴。櫻齋房種畫。明治十二年刊。以下『梅雨日記』）をとりあげる。

『嶋田一郎梅雨日記』初編下　二丁裏

つゞき定（さだ）まる

命数（めいすう）にや重兵衛は

六十一を一期として又来る
春も待ず其年の冬の末
あへなくなりしかば一郎は留め
かねたる涙を片手に埋葬
等も方の如く七日々々の問弔
ひ迄も懇ろに済し忌おも
爰に果てたれば今ははや父母
とて此世に在さねば遠く繁華
な東京へ趣むき兼て志願の
学文を修行して智識を廣め
事を成さんと思ひたち先其事
を小次郎に打明しけるに小次郎も
疾より其志しありとの事に■

■両人初めて心を決し
小次郎は父金十郎に乞ふて
其許しを受早速その〇
〇心構へをぞ
なしたりける
今此両人が斯く
出京を思ひ立しも
畢竟此ほどからして
舊同藩の若者共は
甲乙となく故郷を立
去り既に杉村脇田☒

☒等の親
友も大坂
又は東京へ
寄留せしが

故(ゆゑ)に彼等(かれら)に劣(おと)らぬ
様都会(やうとくわい)に出て勉(べん)
強(きやう) せんと思へばなり

このように、明治式草双紙の本文はほとんどの漢字に振仮名が振られている。たとえば「命数」には「めいすう」という振仮名が振られている。「命数」は「メイスウ」という漢語を表す漢字列であるといえる。ある漢語を表していると認め得る漢字列をここで便宜的に「漢語漢字列」と呼ぶこととする。漢語漢字列には通常漢語の振仮名が振られるが、和語の振仮名が振られることもある。

３．「漢語漢字列」というとらえ方

次に明治式草双紙にしばしば見られる、漢語漢字列に和語の振仮名が振られている例をみていく。

３－１．『梅雨日記』漢語漢字列＋和語振仮名

以下に、草双紙の漢字列の例を一覧にして挙げる。【漢字列】は草双紙に使われている漢字、【振仮名】はその漢字列に振られているものを示す。「『言海』見出し項目」は明治期に刊行された国語辞書である『言海』を、振仮名の語と、漢字列を音読みでみた場合、つまり漢語（字音語）ととらえた場合の語をひいた結果をあげた。[　　]内は、言海の見出し項目直下に置かれている漢字列、《　　》内は、言海の語釈末に置かれることのある「漢ノ通用字」をあげる。（　）内は、語釈の一部を示す。項目がないものは「ナシ」と示す。

	【漢字列】	【振仮名】	『言海』見出し項目
1	接遇	あつかひ	あつかひ[扱]／せつぐうナシ
2	貴君	あなた	あなた[彼方]／きくん（アナタ）
3	合奏	あはせ	あはす[合]／がつそう[合奏]（合ハセテ奏ヅルコト）
4	周章	あはて	あわつ[周章]／しうしやう[周章]

5	愍然	あはれ	あはれ[哀]／びんぜん[憫然]
6	大畧	あらまし	あらまし[荒増]／たいりやく[大略]（オホヨソ）
7	主人	あるじ	あるじ[主]（主人）／しゆじん[主人]（アルジ）
8	突然	いきなり	いきなり[行成]／とつぜん[突然]
9	端緒	いとぐち	いとくち[緒]《端緒》／たんしよナシ
10	豫約	いひなづけ	いひなづけ[言名付]《許嫁》／よやく[豫約]
11	点頭	うなづき	うなづく[項衝]《点頭》／てんとう[點頭]（ウナヅクコト）
12	熟睡	うまゐ	うまい[熟寝]《熟睡》／じゆくすい[熟睡]
13	白粉	おしろい	おしろい[白粉]／はくふん[白粉]（オシロイ）
14	遂人	おつて	おつて[追手]／すいじんナシ
15	侠客	おとこ	をとこ《侠》／けふかく[侠客]ヲトコダテ
16	音信	おとづ（る）	おとづる[訪]（音信ナドニテ）《訪問》／おんしん[音信]（オトヅレ）
17	戸外	おもて	おもて[表]／こぐわいナシ
18	紀念	かたみ	かたみ[形見]《記念》／きねんナシ
19	首途	かどで	かどで[門出]《首途》／しゅと[首途]（カドデ）
20	面色	かほいろ	かほいろ[顔色]／めんしょく[面色]（カホイロ）
21	悸然	ぎよつと	ぎよつと　／きぜんナシ
22	私語	さゝやく	ささやく[私語]／しご[私語]（ササヤクコト）
23	寒気	さむさ	さむさ[寒気]／かんき[寒気]（サムサ）
24	幸福	しあはせ	しあはせ[仕合]／かうふく[幸福]（シ

			アハセ）
25	失敗	しくじつ（た）	しくじり《失敗》／しつぱい[失敗]（シクジリ）
26	知己	しるべ	しるべ[知邊]／ちき[知己]
27	容姿	すがた	すがた[姿]《形勢》／ようしナシ
28	納涼	すゞみ	すずみ[納涼]／なふりやう[納涼]（スズミ）
29	佇立	たゝずみ	たたずむ[佇]／ちよりつ[佇立]（タタズムコト）
30	仮令	たとひ	たとひ[仮令]／けりやうナシ

明治式草双紙はほとんどの漢字列に振仮名が振られているが、そこにはいくつか漢字列と振仮名の組み合わせにパターンがあることがわかる。たとえば「繁華（はんくわ）」「志願（しぐわん）」「若者（わかもの）」「親（おや）」のように、漢字列と振仮名の関係が漢字の音訓と一致しているもの、「容姿（すがた）」「親族（みより）」のように、漢字列は「ヨウシ」「シンゾク」という漢語を表す漢字列であるのに対し、振仮名は「すがた」「みより」という和語であるもの、「不測(ふしぎ)」のように、漢字列は「フソク」を表す漢語で、振仮名は別の漢語である「フシギ」が振られているような場合がある。

漢語漢字列に和語の振仮名が振られているとき、この語は和語の扱いになる。しかし漢語漢字列が振仮名を伴っていなければ（厳密には語は決まっていないことになるが）その漢字列が漢語と見なされることはあるといえる。

このような場合に、語を特定せずに（また、その語を「読む」ことを前提とせずに）その文字列を指し示す必要があることになり、「漢字列」という用語が意味をなすと考える。そして、その「漢字列」だけを見たときに、おそらく「漢語」（由来）であることがわかるのであれば、その段階を「漢語漢字列」と呼ぶことはできると考える。

３－２．『言海』との対照結果

①見出し項目と項目直下の漢字列の組み合わせが一致した語
「あはて／周章」「おしろい／白粉」「さゝやく／私語」「さむさ／寒気」「すゞみ／納涼」「たとひ／仮令」

『言海』凡例（卅八）には「篇中毎語ノ下ニ、直ニ標出セル漢字ハ、雅俗ヲ論ゼズ、普通用ノモノヲ出セリ、「日」月」山」川」等ノ正字ハ、固ヨリ論ゼズ、「辻」峠」杜若」ノ如キ和字又ハ誤用字ニテモ、通俗ナルヲ挙ゲタリ、而シテ、和漢通用ナルハ、｜日｜｜月｜｜山｜｜川｜ナドト標シ、又、和用ナルハ、｜辻｜｜杜若｜ナドト標シテ、語釋ノ末ニ、別ニ漢用字ヲ掲ゲテ、十字街、燕子花ナドト標セリ、此類、識別スベシ、但シ、漢字ノ當ツベカラザルモノハ、スベテ闕ケリ」とある。これらの和語と漢字列の組み合わせは、『言海』が「普通用ノモノ」として挙げた組み合わせであることになる。

②漢字列側から『言海』をひき、語釈に和語が見られた語
「貴君／あなた」「合奏／あはせ」「主人／あるじ」「点頭／うなづき」「白粉／おしろい」「侠客／おとこ」「音信／おとづる」「首途／かどで」「面色／かほいろ」「私語／さゝやく」「寒気／さむさ」「幸福／しあはせ」「失敗／しくじり」「納涼／すゞみ」「佇立／たゝずみ」

これらの結果は草双紙に現れた漢語漢字列と和語振仮名の、語としての結びつきを『言海』が保証しているといえる。「私語／さゝやく」のように、「ささやく[私語]／しご[私語]（ササヤクコト）」と『言海』を漢語漢字列側から引いても和語振仮名側から引いても相互にそれぞれの語がみられるような語は、より語と漢字列の結びつきが強いとみて良いと思われる。

４．「和語漢字列」は成立するか

「漢語漢字列」というものを想定することができるのであれば、「和語漢

字列」というものも想定できるかどうか、検証する。まず、「漢語漢字列」に振仮名が振られる場合、以下の組み合わせが考えられる。

A 漢語漢字列＋漢語振仮名（同語）→「繁華（はんくわ）」「志願（しぐわん）」
B 漢語漢字列＋漢語振仮名（別語）→「不測（ふしぎ）」「動静（やうす）」
C 漢語漢字列＋和語振仮名　　→「容姿（すがた）」「親族（みより）」

また、漢語漢字列に対して、和語漢字列というものを想定できるのであれば

a 和語漢字列＋和語振仮名（同語）
b 和語漢字列＋和語振仮名（別語）
c 和語漢字列＋漢語振仮名
という組み合わせが考えられることになる。

４－１．「和語漢字列」を抽出する

「和語漢字列」が成立するかを確認するために、「和語漢字列」を抽出する方法を考察する。明治期に刊行された国語辞書『言海』を使用して検証する。「漢語漢字列」にあてはめて仮に「和語漢字列」の基準を定めるとすれば、

１．漢字列だけを見たときに和語を想起させる
２．漢字列が「漢語漢字列」（漢語由来）ではない
３．音読みされない
ということが求められると思われる。ただし、今回の考察範囲は二字以上の漢字列に限ることとする。

４－２．『言海』について

大槻文彦によって普通辞書として編纂され、明治二十四年に刊行を終えた国語辞書である『言海』は、見出し項目直下に掲出する漢字列を、「和ノ通用字」と「和漢通用字」とに区別して表示している。そして語釈末にさらに「漢ノ通用字」を挙げている。また、見出し項目の語が和語である

か、漢語であるか、それ以外であるかを、それぞれ違う字形の活字で表示している。『言海』が示すこれらの区分を利用して、「和語漢字列」の抽出を試みる。

今野真二「辞書の語釈―『言海』の漢語を緒として―」（名古屋大学グローバル COE プログラム『ことばに向かう日本の学知』2011 年　ひつじ書房）において、『言海』の見出し項目の構成を分類しているが、その後さらに検証した結果、『言海』には以下のすべてのパターンの項目が認められた。

a　見出し項目和語＋[和ノ通用字]＋語釈
b　見出し項目和語＋[和ノ通用字]＋語釈＋漢ノ通用字
c　見出し項目和語＋[和漢通用字]＋語釈
d　見出し項目和語＋[和漢通用字]＋語釈＋漢ノ通用字
e　見出し項目和語＋[通用字なし]＋語釈
f　見出し項目和語＋[通用字なし]＋語釈＋漢ノ通用字
g　見出し項目漢語＋[和ノ通用字]＋語釈
h　見出し項目漢語＋[和ノ通用字]＋語釈＋漢ノ通用字
i　見出し項目漢語＋[和漢通用字]＋語釈
j　見出し項目漢語＋[和漢通用字]＋語釈＋漢ノ通用字
k　見出し項目漢語＋[通用字なし]＋語釈
l　見出し項目漢語＋[通用字なし]＋語釈＋漢ノ通用字

このうち、『言海』が見出し項目直下に示す「通用字」が「和語漢字列」に相当すると思われるのは
a　見出し項目和語＋[和ノ通用字]＋語釈
b　見出し項目和語＋[和ノ通用字]＋語釈＋漢ノ通用字
であると思われる。
試みに「あ」で始まる見出し項目から、見出し項目の活字が「和語」で、見出し項目直下の漢字列が「和ノ通用字」（二字漢字列）のものを検索した結果、713 項目が該当した。そのうちの 30 項目を以下に示す。

	見出し項目	活字	漢字列	標	漢ノ通用字
1	あいたところ	和語	朝所	和	／
2	あいたんどころ	和語	朝所	和	／
3	あうら	和語	足占	和	／
4	あかあは	和語	赤粟	和	／
5	あかあり	和語	赤蟻	和	黄蟻
6	あかいぬ	和語	赤犬	和	黄犬
7	あかいも	和語	赤薯	和	朱藷
8	あかいわし	和語	赤鰯	和	／
9	あかうなぎ	和語	赤鰻	和	／
10	あかえひ	和語	赤鱣	和	／
11	あかがさ	和語	赤瘡	和	／
12	あかがし	和語	赤樫	和	血櫧
13	あかがしは	和語	赤柏	和	／
14	あかがに	和語	赤蟹	和	／
15	あかがねしぎ	和語	銅鷸	和	／
16	あかがひ	和語	赤貝	和	蚶
17	あかがへる	和語	赤蛙	和	赤蛤
18	あかぎ	和語	赤木	和	／
19	あがき	和語	足掻	和	／
20	あかきじ	和語	赤雉	和	／
21	あがく	和語	足掻	和	踠
22	あかくさ	和語	赤草	和	野蓼
23	あかぐま	和語	赤熊	和	麁
24	あかげ	和語	赤毛	和	驊
25	あかこ	和語	赤子	和	小紅蟲
26	あかごけ	和語	赤苔	和	紫衣
27	あかごめ	和語	赤米	和	／
28	あかじみ	和語	垢染	和	／
29	あかじむ	和語	垢染	和	／
30	あかずな	和語	赤砂	和	／

同じく「け」で始まる見出し項目を検索した結果、53 項目が該当した。

1	けあげ	和語	蹴上	和	／
2	けあは	和語	毛粟	和	／
3	けあひ	和語	蹴合	和	／
4	けいも	和語	毛薯	和	／
5	けうけ	和語	毛受	和	／
6	けうとし	和語	氣踈	和	／
7	けおさる	和語	氣壓	和	壓倒
8	けおそろし	和語	氣恐	和	／
9	けおとる	和語	氣劣	和	／
10	けおり	和語	毛織	和	毛布
11	けかへす	和語	蹴返	和	／
12	けぎは	和語	毛際	和	／
13	けぎれ	和語	毛切	和	／
14	けぐつ	和語	毛沓	和	／
15	けぐるま	和語	毛車	和	／
16	けこみ	和語	蹴込	和	／
17	けこむ	和語	蹴込	和	／
18	けごろも	和語	毛衣	和	裘
19	けしずみ	和語	消炭	和	浮炭
20	けすぢ	和語	毛筋	和	髪理
21	けだかし	和語	氣高	和	軒昂
22	けだし	和語	蹴出	和	／
23	けたつ	和語	蹴立	和	／
24	けたで	和語	毛蓼	和	／
25	けたふす	和語	蹴倒	和	踢仆
26	けたゆき	和語	桁行	和	／
27	けちらす	和語	蹴散	和	／
28	けづけ	和語	毛付	和	／
29	けつまづく	和語	蹴躓	和	躓
30	けづめ	和語	蹶爪	和	距

ここに示した、見出し項目が和語で見出し項目直下の通用字が「和ノ通用字」である場合に示される漢字列が「和語漢字列」と言えそうである。『言海』の項目について漢字列を検証してみると、以下のように見受けられる。

■見出し項目和語＋和ノ通用字→和語漢字列
■見出し項目漢語＋和ノ通用字→漢語（字音）漢字列　…字音語、もしくは漢語のそれとは日本における意味が異なる場合《例》愛敬（あいきやう）・挨拶（あいさつ）・印鑑（いんかん）など
■見出し項目和語＋和漢通用字→漢語漢字列　…漢語漢字列＋和語振仮名《例》鬼火（おにび・きくわ）
■見出し項目漢語＋和漢通用字→漢語漢字列

『言海』の「通用字」欄には「和ノ通用字」と「和漢通用字」の二種しか標が示されないので、それらを区別する条件は、排他的であると考えられる。その呼称から見れば「和ノ通用字」のほうが「和漢通用字」よりも使われ方が限定的であるように思われるが、「和ノ通用字」に中国における使い方とは意味の異なる漢語（由来の語）も含まれていると考えられるので、「和漢通用字」＝漢語漢字列、「和ノ通用字」＝その他の漢字列であることになる。そして見出し項目が和語であれば、「和ノ通用字」で示される漢字列が「和語漢字列」として抽出されたといえそうである。しかし、和語がそもそも漢字を伴うことを前提としないためか、漢字列との結びつきが弱いように思われる。今後さらに検証を重ねたい。

５．その他の「漢字列」

漢字列について、「漢語漢字列」と「和語漢字列」を設定して考察したが、これらの他に「その他の漢字列」というものも考えておく必要があると思われる。漢字列のみかたは、漢字で書かれている文字列（だけ）があったときに、その漢字列がいわばどのような構成になっているかということを判断することによって、語と漢字列の結びつきを考えるとらえ方であるので、漢語のようにすぐに語と結びつきやすい場合と、そうではない場合があると思われる。たとえば「熟字訓」や「当て字」とよばれるものや、

「亜米利加」「倶楽部」「五輪」など、「外来語漢字列」とよべそうなものも考えられる。本稿の目的は漢字列のすべてを分類することをめざすものではなく、漢字列側からとらえられる事象について考察するものであり、そのような視点が語の観察においてひとつの観点になりえるのではないかと考える。

６．まとめ

これまで日本語学の研究論文等において、漢字で書かれている文字列について「漢字語」「漢字表記語」「漢字列」などさまざまな呼称をもって指し示されてきたが、その用語の概念について、必ずしも共通認識がされてきたとは言えず、また、定義されて使われてきたとはいえない。

「漢字列」という用語は、語を特定せずに漢字で書かれた文字列そのものを指し示せることが有用であると考えるが、「漢字」で書かれているために、その「語」の意味を漢字を通じて想起させることがある。そのことによって、「漢字列」にはただ文字列として認識する段階よりももう一歩、「語」に近い段階を想定できる場合があることになる。本稿ではその「もう一歩「語」に近い段階」として「漢語漢字列」を示し、さらにそこから「和語漢字列」という発想についても検討した。

「漢語」は漢字で書かれることを前提とするために、「漢語漢字列」はその用語からもどんなものを示しているのか想定しやすい。しかし、「和語漢字列」に関しては、すぐにそれを断定できるほど「漢字列」が「和語」（由来）であるとは認識し難いように思われる。

「和語漢字列」と呼べそうな「漢字列」を抽出するために、本稿では『言海』が見出し項目直下に示す「通用字」を表示し分けていることを利用して、検証を行った。それによって得られた漢字列はおおむね「和語漢字列」とみてよさそうではあるが、今後さらに検証していきたい。また「和語漢字列」を想定することによってどのような研究、見方ができるのかについても本稿の範囲では十分に検証できなかったといえる。大槻文彦が『言海』において通用字を表示し分け「識別スベシ」としたことと、認識のしかたが通ずるかどうかも慎重に判断したい。

また、「漢語漢字列」と「和語漢字列」は排他的な関係ではなく、「その

他の漢字列」を想定しておかなければならないといえる。本稿では明治期の資料にしか触れることができなかったため、今後の課題としては「漢語漢字列」という、「漢字列」を一歩「語」として特定した段階の見方が、時代を超えた通時的な見方として有用であるかということの検証も必要であると考える。

今後の研究において「漢字列」というとらえ方が定着すれば、日本語の表記研究・語彙研究において有意義な視点のひとつになり得るのではないかと考える。

参考文献

門前正彦　（1991）「語彙に関する一問題」―「漢字語」をめぐって―（『語源探求』三　明治書院）
今野真二　（2008）『消された漱石―明治の日本語の探し方』（笠間書院）
今野真二　（2011）「辞書の語釈―『言海』の漢語を緒として―」（名古屋大学グローバル COE プログラム『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房）
今野真二　（2013）『『言海』と明治の日本語』（港の人）
田島優　（1998）『近代漢字表記語の研究』（和泉書院）
根本真由美（2007）「高橋五郎『[和漢／雅俗]いろは辞典』の資料性」（『日本語の研究』第三巻四号）
山田俊雄　（1978）『日本語と辞書』中央公論社

『[和漢／雅俗]いろは辞典』（高橋五郎著　1889 年）
『言海』（大槻文彦著　1891 年）
『漢字百科大事典』（1996 年　明治書院）
『日本語学研究事典』（2007 年　明治書院）
草双紙『嶋田一郎梅雨日記』初編～五編、各上下巻（明治 12 年）